Title：新報4574号.ec7　Page：1　Date：2013/08/03 Sat 16：22：51

教団新報

定価 1部140円(本体133円〒共200円)
予約購読料 1年分 〒共 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140－9－145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人 竹前 昇
編集主筆 竹澤 知代志

イースターメッセージ

ローマ人への手紙 八章一～一一節

復活と生まれかわり

李 孟哲

復活について

キリスト教が宣べ伝えている主イエス・キリストの復活のメッセージはキリスト教信仰の中の最も大事なことです。

しかし、一般の人々はそれを理性的に検証しようとしますので、なかなかキリスト教に入信することができません。復活は本当にあったのか、人は復活できるのか、復活する必要があるのかというのが彼らの疑問です。確かに、人類の歴史の中で、それを経験したことはありません。

聖書の中に何人かの復活について記されていますが、彼らはたとえ一度復活しても最後にはやはり死んでしまったのです。ですから、人の理性のみで判断しますと、復活の事実は受け入れ難いものです。

しかし、パウロはきっぱりと言いました「もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい」(1コリント15・14)。

人の理性から見ますと、求道者にとってはジレンマでも、救われた者にとっては信仰の奥義なのです。復活の信仰は理性的に説明できないかもしれませんが、理性を超えたところでその奥義を理解し、受け入れることができるのです。

東京台湾教会

理性は人の死の問題を解決できない

日本で生活しているこの数年間、私にとって最も悲しく釈然としないのは鉄道での人身事故です(台湾ではあまり起きないのだが)。大抵自殺しようとする人はきっと理性的には解決できない困難に遭って、死によってすべての悩みや苦しみから解決できると考えたからだと思います。しかし、実際はその逆です。人の悩みや苦しみは肉体的な部分と霊的な部分があり、最後には必ず霊的な苦しみに変わるのです。たとえ人の肉体が死んでも霊が滅びないので、霊の苦しみは解決できないのです。なぜなら、もし人が肉体の死をもって霊的な苦しみを解決できれば、動物と何ら変わりがないのですから。もし、肉体の死をもって霊的な苦しみをも合わせて解決できれば、人生がよっぽど楽になります。でも、実際は不可能なことです。これはちょうどイエス様が話されましたたとえ話の中に出てくる金持とラザロの死後の世界のようなものです。金持が死んで肉体が滅んでも彼の霊は永遠に脱出できない、終わりのない苦しみの中に入ってしまったのです。このような苦しみは、肉体の死によって解決できるものではありません(参考ルカ16・19～31)。

パウロも「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6・23)と明言しました。パウロがここで言う“死”は勿論肉体の死を指しているのではなく、霊的な命の惨めな状態を言っているのです。人は霊的に解放されて、はじめて悩みや諸々の問題を解決できるのです。これは即ちパウロが言っているように、神は人にとって愚かで理解できない言葉を用いて、救いにあずかる者に力を与えたのです。この救いは簡潔に言えば主の復活を信じ、且つ主の復活によって信じる人に生まれかわりをもたらすことを信じることです。復活と生まれかわりは一つの事柄の両面なのです。主イエスがユダヤ人指導者ニコデモに言われたように「だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ3・3)。

人には復活、生まれ変わりが必要

有名な映画俳優トム・ハンクス(Tom Hanks)氏が二〇〇〇年に主演した“キャストアウェイ”(Castaway)という名の映画の中で、宅配便“フェデックス”(FedEx)のエンジニア チャック・ノーランド(Chuck Nolan d)の役を演じていました。

彼は出世をしていました。しかし、ある日出張旅行の途中、チャックの乗った小型飛行機が事故で海上に墜落してしまい、彼は一人で無人島に流されました。文明的な生活から切り離され、人と人の関わりも完全に断たれた彼は“生きる”ことのみが生活の目的でした。孤島で原始的な生活を四年間送った後救出されましたが、彼の人生観がそれによって大きく変わりました。彼は人生の目的や意義について考えるようになり、全く新しい目で仕事や生活に取り組むことができました。

確かに、人はもし、命について、霊的、肉体的な生活面から考え直すことができなければより多くの罪や苦しみを重ねることになります。これは律法の定めと人間がそれを実践する上での戦いでもあるのです。人間の歴史的経験から見ますと、人は神の御旨を律法の条文に変え、律法の要求を通して人が自分の欲望によって犯した罪を解決し、人の行いを神の要求に一致させようと試みました。

しかし、実際、律法は人の欲望、人の罪を解決できないばかりか、人が律法を守ろうとするところで己を見失ってしまい、その結果、より多くの罪を犯すことになります(ガラテヤ5・17)。それゆえ、神はイエス・キリストの死と復活を通じて、人に赦しと寛容の愛を表し、また復活の権威をもって人の命の難題を解決してくださったのです(ローマ8・1～4)。

イエスの死からのよみがえりは私たちに生まれかわりの答えと希望を与えてくださり、また、その復活の権威と力によって私たちの形あり、限りある命を徹底的に変えて下さったのです。

復活はあの世のことであり、またこの世のことである

イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が人の内に宿ってはじめてこのすべてを新しくする御霊が人を死ぬべき惨めな状況から生かしてくださり、新しく生まれ変わらせてくださるのです。このような救いは、肉体の命が終わってから始まるのではなく、生きているこの時点から新しくされるのです。肉体が滅んでから始まる霊的な命を望むのではなく、イエスがキリストであり、救い主、復活の主であると信じるこの時点から霊的な生活が始まるのです。このような命が人を肉のことを思う気持ちから霊のことを思う気持ちへと変えてくださるのです。肉のことを思う生活から霊のことを思う生活へと変えることのみ、本当の命と平安が得られますし、この救われた新しい命が永遠に続くことができます、これが復活なのです。イエスが言われました「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない」(ヨハネ11・25～26)。

信じれば与えられる

皆さん、復活のメッセージは不思議ではありますが、理解できない、受け入れられないものではありません。人間は己の欲望によってもたらされた苦しみに戸惑ったりしているところを見ますと、このような苦しみや悩みは理性の次元ではなくなっているのです。もともと人間は新しいミレニアム、二十一世紀に強い憧れや期待を持っていましたが、実際に入ってみますと、想像していた完璧さや安らぎがないばかりか、災難や戦争が絶え間なく襲ってきます。理性がすべての問題を解決できる万能の薬ではないことが明らかです。現世の問題も解決できないならましてや人間にとって神秘的な命の問題はなおさらです。

イエスは死をもって私たちに平安の確証を与えてくださいましたので、主の力を信じ、その教えを守るなら主からの平安が与えられるのです(ヨハネ14・26～27)。復活の信仰は私たちの理性を超えているかもしれませんが、理性で信仰を選ぶことができるのです。「信じて求めるものは、みな与えられるであろう」(マタイ21・22)と主イエスは約束されています。

(東京台湾教会牧師)

Title：新報4574号.ec7　Page：2　Date：2013/08/03 Sat 16：22：59

ドイツ教会の教師養成

神学部との関係の中で（上）

神学部の学問の自由と教会と

教会と切っても切り離せない関係にあるのが神学校、つまり教師養成機関である。日本基督教団には教団立東京神学大学の他に五つの教団認可校があり、教団から教師養成の任務を委託されている。教会と神学校の関係がいかなるものであるかについて、様々な議論が出来るが、ここでは視点を移してドイツ・バーデン領邦教会における教会と神学部のあり方について取材してみた。

△　△

まずは前提となる基礎知識について。ドイツの人口のほぼ三分の一がローマ・カトリック教会員、三分の一がドイツ福音主義教会（EKD）員、残りの三分の一が他の自由教会か他宗教、または宗教を特に持たない人という風に区分される。今回取材したバーデン領邦教会はこのEKDに加盟している合同派の教会の一つで、地域的にドイツ南西部（バーデン・ヴュルテンベルク州）に位置する。それぞれの領邦教会は独立しており、おのおの教会憲法を持っている。バーデン教会の場合は教師試験をハイデルベルク大学神学部に委託し、協力して試験を行うことになっている。教会数は五五〇、信徒の総人数は一三〇万人（二〇〇四年現在）と発表されている。なお教区の数は二九）。すべての大学神学部は国立（次回で述べる教会立神学校は別）である。ハイデルベルク神学部の昨学期の在籍学生人数は約六八〇人である。五～六年の学びののち受験する第一試験をへて実践の場での訓練が始まる（今回はこの段階を「牧師補」と訳した）。ここには学校教師も含まれる。さらに二年半の実習訓練を経て第二試験を受験し、按手礼を受領することになる。この第二試験の受験者が今年は二五名で、これはほぼ領邦教会で必要としている牧師の人数と合致する。ただし、現段階では合格後しばらく待機を余儀なくされる（順番待ち）状態で、この状態はしばらく続く見込み。ただし受験者そのものは若干減少気味ということであった。

△　△

教会と神学部の関係について基本的なことをまず伺えたのはクリスチャン・メラー教授（実践神学）である。

「神学教授の領邦教会へのコミットメントの仕方は教師試験だけではありません」。これ以外に常時、領邦教会の各種委員会に最低一人神学教授が配置されているという。しかし当然のことながらすべての神学教授が同じように教会にコミットするわけではない。熱心な教授とそうではない教授がどうしても生まれてくる。「ただ、この州では神学部と教会との関係はうまくいっているのではないでしょうか。リューデマン教授のようにハノーファー教会と深刻な対立を引き起こすような例は全くの例外です」。ゲッチンゲン大学神学部で新約学を講じていた同教授は「キリストの復活はなかった」と公言し、教会は教師試験の担当から外れることを要求する。その結果同教授は宗教学の教授に転ずるのである。「発言そのものを封じるのではないことは、大学における学問の自由の原則からいっても必然的なことかも知れません。すべては教授に任されているのです。大学神学部の目的は第一に学問的研究です。教師養成は第二の目的といって良いでしょう。教会立神学校（注・次回参照）はまた異なりますが」。

△　△

この「学問の自由」はタイセン教授（新約学）もまた強調する。「確かにバーデン州の場合、学問的神学と教会とに軋轢が生じた時期がありました。八〇年代前半のことです。牧師のなりてが極端に減って、教会はそれまで教会関係の施設で働いていた執事に二年程度の神学教育を積ませた後牧師に任職していました。長い信仰生活と大学で学んだ神学との間に違和感があったのでしょう。大学の神学教育に対する強い異議が、特にそういった牧師の多かった地区から唱えられたのです。そこで、神学教授が一人最低でも半年に一度その地区の教会に泊まりがけで赴き説教や講演をするように取り決めたのです。再び牧師のなりてが増えてから、自然とそういった声も小さくなりました。ただ、私としてはそういった場合でも神学教授がやるべきことは本来講演のような形がよいと思うのですが」。

「神学が直接教会に貢献するというのではなく、学問の自由が保障されるべきです。教会との関係はそれとは別個に考えるべきで、たとえばこの大学には大学教会があり、また大学公認のキリスト教サークルがあります。先日も私が講演に行きました。別個とはいっても重要であることには変わりありません」。

タイセン教授がまた強調するのが、教会と大学という二項関係だけでなく、それ以外の流れも重要だという点である。「八〇年代後半から再び牧師志願者が増加します。学生の数でいっても八〇年代前半の一番少なかった時期で五〇〇人だったのが二〇〇〇人ぐらいに増加したのです」。原因はいくつかあって、聖書の批評的解釈が動向にまとまりをつけ始め、それらを学んだ上で牧師として説教をすることに十分めどがついたということもあるが、「ドロテー・ゼレの存在が一番象徴的かも知れません。彼女は七〇年代後半までキリスト教内部における教会批判運動の急先鋒でした。彼女の文献読解力は学問的水準としても高い方だと言えますが、彼女を教授として招聘する大学神学部はドイツにはなく、アメリカに行くことを余儀なくされます。しかし元修道士との結婚の後、独自の霊性運動を展開し、再び教会に戻ってくるのです」。その時期と神学部が人気学部に転ずる時期は一致するという。ゼレは今でも特に女子神学生からの人気を集めているが一昨年に逝去した。

△　△

さて、ここで教会の側からの声を取材してみた。大学の地元、ハイデルベルク地区の地区長をし、聖霊教会牧師でもあるステファン・バウアー牧師である。

「確かにリューデマン教授の事例は特殊かも知れませんが、少なからず似た事例をバーデンも抱えているのです」。ハイデルベルク大学の新約学のある教授は、最新の著作「新約聖書の使信は真実なのか？」に限らず、新約聖書文書に正典としての特別の位置づけを与えず、他の書物と全く同じように古典的価値のみを与えるという研究をし、著述活動をしているのみならずリベラル系の新聞に教会批判をときおり寄せているという。「私は問題だと思うし、このことは本人にも直接言っています。私だけではなく領邦教会本部でも同じように問題を感じているようです」。

「ただ、領邦教会とハイデルベルク大学神学部は良い関係を保っており、定期的なコンタクトもなされていますし、また教授個人を例に挙げるとすれば、最近聖餐論についての著作を書いたウェルカー教授はたびたび牧師会に招かれ、そのたびに聖餐論についての講演を行い、その牧師会での牧師からの反応を論文にフィードバックさせて今回本を出版しました（注：『聖餐においてなにが起きているか』）。そういった努力は熱心になされていると思います」。

△　△

ここまでをまとめれば、「神学の自由は何のためにあるのか」ということになろう。元々「学問の自由」とは大学が創設されて以来、あらゆる権威から自由になって真理を探究するために保証されているものである。しかし神学が教会の営みと無関係になされることはあり得ない。気がつくことは、「学問の自由」を標榜する、今回取材した神学教授達も、皆一様に教会との関係を良好に保っているということである。

次回は、さらに取材を進めた結果を紹介することにする（今回取材した方々の紹介・写真などは次回にまとめて掲載します）

（上田彰報）

ハイデルベルク信仰問答が作られた「聖霊教会」

学問的神学セミナーおよび神学部図書館入り口

現在の大学教会「ペトロ教会」

実践神学・奉仕学セミナー

Title：新報4574号.ec7 Page：3 Date： 2013/08/03 Sat 16：23：09

天と地のひびき轟く

『信徒の友』40年の感謝のつどい

『信徒の友』40周年記念感謝会が二月一二日午後一時半から、東京杉並区の阿佐ヶ谷教会で開催された。

小塩節氏による講演　阿佐ヶ谷教会にて

二〇〇四年度はこの記念のために、例年の『信徒の友』セミナーに代えて、全国各地（兵庫、岩手、愛媛）で、執筆者たちによる記念講演会を開いてきたが、今回はその最後として「講演とオルガンのつどい」として行われた。

第一部は礼拝で、出版局前理事長の四竈揚牧師が司式し、讃美と聖書朗読（ヨハネによる福音書6章27節、34～35節）の後、感謝の祈り（連祷）を編集委員、執筆者、画家、読者の代表で捧げた。

第二部の「講演とオルガン演奏」では先ず、ドイツ文学者でフェリス女学院理事長の小塩節氏による「天と地のひびき」の講演があった。氏が幼少から親しんでこられたドイツの音楽とその作曲者たちとゲーテとの出会いが紹介され、さらに彼を感動させたバッハの旋律が「神を賛美し、人の心を生きかえらせるために」生まれたことが語られた。

言葉の彫像のようなこの講演に応えるかのように、バッハ・コレギウム・ジャパンの音楽監督であり東京芸術大学教授の鈴木雅明氏が、バッハのオルガン曲五曲を演奏された『ファンタジア ト長調』『ファンタジアハ短調』のあと、なつかしい「バビロンの流れのほとりにて」「主よ、人の望みの喜びよ」が奏でられ、そして最後の大曲「プレリュードとフーガ ホ短調」が轟き渡った。上からの光を浴びて力強く天に昇ってゆくような旋律に一同は圧倒された。

編集長古屋治雄牧師の挨拶で、深い感動のうちに散会したのである。

そのあと、来賓者たちを中心とした感謝会が、別室で大村直子編集委員の司会で持たれた。秋山徹出版局長の謝辞のあと、『信徒の友』40年の歩みがスライドで紹介された。

ついでこの雑誌創刊にいたる教団指導者や有志の熱意、三浦綾子氏をはじめとする多くの執筆者達の協力、全国各教会の信徒の愛読と支援、教団紛争の中で霊性豊かな内容を作るための努力などが、次々と語られた。大宮前編集長の祈りをもって感謝のうちに会が閉じられた。

（大宮　溥報）

札幌で共同の研修会開催

統一原理問題東京地区連絡会

一月三一日～二月二日、北海道クリスチャンセンターを会場に統一原理問題東京地区連絡会（東京、西東京、関東、神奈川教区）共同研修会が開かれた。

講師は北大の宗教社会学教授である櫻井義秀教授とカウンセラーのパスカル・ズィヴィ氏、札幌「青春を返せ裁判」で統一協会から元信者たちに画期的勝訴判決を勝ち取った郷路征記弁護士の三氏。北海教区の牧師、被害者家族も含め、延一八名参加の研修会となった。

教団の抱えた三つの裁判全てが勝訴となり、一つの山を越えた観のある中での研修会であったが、今回は心に傷を受け、トラウマや被害妄想に悩む被害者の問題が共通話題となった。

この問題に取り組む全国の現場では、かつてのような初期段階ではなく長期にわたってカルト集団に所属した被害者や家族の相談が増える傾向にある。

カルト集団によって、あるいは不適切な介入によって（日本基督教団での相談ではそうした事態が起こらないよう徹底している）心に傷を持つ元メンバーの相談も現場では抱えざるを得ない。

その場合に、相談者が被害者の根拠のない「誤った記憶」「構築された語り（ナラティブ）」に巻き込まれたり、攻撃対象とされたりするというケースが起こり得る。

櫻井義秀先生の講演

既に九二年に米国では「誤った記憶症候群」協会が、「性的虐待を行った」として実の娘から思いもしない告発を受けた親たちによって設立され、この深刻な問題が提起されている。被害者の記憶や証言の全てが真実でなく、「悪意」とは別に被害者同士の記憶の摺り合わせの中で妄想のように構築されてしまうことが起こり得るという問題である。ネット上で被害者同士が相互カウンセリングし合う中で、「妄想」が悪質な「ジャーナリスト」の介在によって一人歩きすることさえ、現代では起こり得る。

こうしたケースに対する宗教社会学、心理学、法律家のそれぞれの立場からの見解を聞くことが出来たのは大きな収穫であった。専門家との共同作業の必要性を感じさせられた。

厳しい財政状況の中で

予算・決算委員会

第34総会期の最初の予算決算委員会は二月十日、十一日の両日、昨年十二月の常議員会において選任された七名の委員全員が出席し教団会議室で開催された。

冒頭、総幹事挨拶があり、新委員会が選任された経緯の説明、今期の予算決算委員会に望む事、実務的仕事として厳しい財政状況の中で、さらに教団財政の明確化が進められ、健全化に向かう事が期待されていると述べた。

ついで委員会組織について協議し、互選により委員長に飯塚拓也、書記に池田浩二、常任委員に伊藤瑞男の各氏を決定した。

担当の計良祐時幹事から最近の事務処理事項について報告があり了承した。

今期の委員会は前33総会期から継続で、各委員が当委員会に関わる事項を分担・検討し、その結果を報告・協議する事を確認した。

具体的には、①会計構造の見直し、②C表の見直し、③二〇〇六年度予算審議、④二〇〇五年度実行予算審議、⑤全国財務委員長会議用の各教区報告書式の統一、⑥全国財務委員長会議の準備、⑦貸出資金勘定、別口勘定、活動資金仮勘定等の精査、⑧未収金、前払金の調査、⑨予算執行管理体制の確立、⑩教団財政全般の健全化、⑪ペイオフ対策、等課題は山積している。

月次決算では、計良幹事より一月末現在の経常会計収支計算書並びに貸借対照表の説明があり承認した。

二〇〇四年度第二次補正予算についても、計良幹事より説明があった。

当初予算との差異に関して、予算管理のあり方等について検討を行い、補正予算に関して概要の説明書をつける事の要望を付して承認した。

尚今年度末までの見通しとしては、大きな変更は予想されないので、三次補正は組まなくても良い見込みである。

教団事務局旅費規定の改訂については、事務局提案の第六条、および第九条の改訂案を了承した。

当委員会の最重要課題である、予算執行管理体制の確立による教団財政の健全化については総力をあげて取り組む事を確認した。

（池田浩二報）

教区コラム

教区雑感

四国教区　芦名弘道

准允の教区面接で教団の教師となる志を問われ「各個教会に仕えることによって全体教会に仕えたい」と答えた。二〇年を経た今も、その思いは変わらない。

ある時、教区の先輩牧師から「教区は各個教会を支える主体である」と聞き、自分の教会への召しと教区の役割が真っ直ぐ繋がった。換言すれば「教区は各個教会のためにある」となろう。

しかし「ために」ということの理解は決して一様ではない。これを教区内諸教会全体の益のためと受け止めれば、教会は他教会のためにという視野を持つこととなり、自己の利害に固執せず、互いに仕え合う中で自らが問い直され、常に新しくされる歩みが必然化する。

それに対し、教区は自分たちのためにあると受け止めれば、自教会の都合の良し悪しで教区を測り、悪ければ都合良くしようと水面下の画策が始まる。それは結局利己主義に他ならない以上、自己を問い直す機会を失い、無自覚の内に足下から壊死しはじめる。

パウロは、利己的欲求と嫉妬を原動力に伝道する者について、キリストが告げ知らされているのだからそれも喜ぶと言い切った（フィリピ1・17）。それは、心底からキリストのために生きようとする魂の告白であり、「あなたは誰のために在ろうとし、生きようとしているか」という深い問いと厳しい警告を背後に持っている。

そのパウロが、今私たちの教区に、教団に生きていたら、何と言ったであろうか。

（四国教区総会副議長）

消息

仲本幸哉氏（隠退牧師）

昨年一二月一七日、逝去。七二歳。大阪府に生まれる。一九五七年、同志社大学神学部大学院修了後、国分教会、住道一粒教会、長浜教会、高石教会を経て、七一年から二〇〇一年まで神戸雲内教会を牧会し、隠退した。遺族は妻の志津江さん。

大石啓三氏（無任所教師）

一月二六日、逝去。七四歳。神奈川県に生まれる。一九六二年、日本聖書神学校卒業後、千葉本町教会に赴任。千葉南教会を開拓し、六四年から九〇年まで二六年間牧会。その後、南房総に於て地域伝道に努めた。遺族は妻の貞子さん。

小泉定夫氏（夜久野教会担任）

一月二七日、逝去。七三歳。栃木県に生まれる。一九五三年、関西農村教化研究所飯盛野伝道学校卒業。八六年から八八年、佐伯教会に赴任し、九五年から夜久野教会担任として牧会した。遺族は妻の翠さん。

Title：新報4574号.ec7 Page：4 Date： 2013/08/03 Sat 16：23：18

牧師のパートナー

雪国の牧師館日記

荒瀬 典子
（喜多方教会員）

一月〇日 今日は幼稚園のソリ滑りの日。昨日までの吹雪が止んで青空に銀世界が眩しい絶好の雪遊び日和。近くの公園の雪山まで三十人の園児、二人の先生のお手伝いとして私もお供。時々ノリコセンセイとなるのも大事な務めだ。

一月〇日 冷え込みが厳しい礼拝堂、早くからストーヴに火を点け、お湯を沸かし、主日の準備をする。温かさが何よりの歓迎、CSにはホットココア、昼食用にはうどんの用意をする。宿屋のおかみさんの気分だ。時にはトイレの排水まで凍結しているので、お湯を溶かすなど雪国ならではのこともある。

一月〇日 礼拝後役員会もあって夫も疲れた様子なので、夕方、町の「道の駅」の温泉に誘う。車で十分。入湯料三百円というのも嬉しい。贅沢な豊かな楽しみに感謝。雪見の露天風呂は最高！

一月〇日 雪があまりにも美しいので写真を撮ることにした。十二年前、牧師のパートナーになって教会行事等を撮り始めてから写真撮影が好きになった。自然豊かな東北の被写体が私の心を捉える。教会のアルバム作りも私の趣味兼教会活動記録の仕事と思って楽しんでいる。喜多方に移って四年、四冊のアルバムが出来た。

二月〇日 午後、夫と共に病院訪問。高校時代に受洗され、その後、心病まれて三八年間も入院されている兄弟がおられ、時々お訪ねしている。ベトザタの池の畔に暮らす程の長さ、神様を忘れず生きてこられた兄弟の素朴な信仰にこちらが励まされる。

二月〇日 火曜日は太極拳の日。喜多方は太極拳の町として有名で私も教会の姉妹に誘われて始めた。運動は苦手の私にも楽しめる老化防止、雪道転倒予防にピッタリで、心も体もリラックス。顔馴染みも増えた。バザーや特伝、クリスマスの案内チラシも、ここで配ると効果がある。

二月〇日「いるかね？」とF兄が顔を覗かせる。数年前より郷土史研究の為、隣村に住み着いている八五歳のF兄に触発されて私も村々の歴史に興味が出て来た。こんな付き合いから様々な人が出入りして、牧師館がサロンと化して話が弾むひとときもしばしば。

二月〇日 この数日は大雪が続いて外出もままならず、思い立って写真整理をした。去年もお客様が多かった。あの友この友。会津は見所が多いので「ペンション・キタカタチャーチ」も大繁盛。夫と私は観光ガイド並に詳しくなった。築後七〇数年の古民家牧師館のぬくもりも愛されて、宿泊者数知れず。なるべく礼拝に出席して頂けるよう企画する。懐に余裕のある方には勿論おすすめの温泉宿に泊まって頂く。間もなく春休み、CSの子供たちも牧師館でのお泊まりを楽しみにしている。

二月〇日 九州っ子だった私が、上京した大学で夫と出会ったことからこの旅は始まった。キャンパスで信仰を育まれ、平信徒伝道者として神様を証しする家庭を作ろうと約束したものの、三〇年後まさか牧師のパートナーになろうとは思ってもいなかった。横浜での生活や友との関わりを離れ、不安を抱えて始まった牧師館の生活は、主の備えも確かな恵みの日々であった。

感謝して旅の終わりまで恵みを賛美しよう。

幼稚園・ソリすべりの日に近くの桜ヶ丘公園にて

津波インド・ダリット村 被害甚大 命があぶない！

二月八日～十六日迄、津波で甚大な被害を受けたインド洋の海岸に面したタミール州のダリット村を訪問した。五日間かけて南インド合同教会の津波現地救援スタッフ三名、谷本の計四名で津波に襲われた地域十二の村々を訪問した。

チェンナイ市から一六〇キロ離れたクドリア村。村は津波によって跡形もなく、ただここに昨年十二月二六日午前八～九時、津波が押し寄せて来るまで家があったという家の敷石の跡が残っているだけ。

この村の生業は漁業。辺り一面、無残にも津波によって壊れた船の残骸。網の散乱。海辺で茫然と立ちつくす人々と話し合う。彼らは「津波によって全ての物を失った。死者六一七人。負傷者一九八人。家屋一五、二〇〇軒が一瞬に消えた。全ての船が使えなくなり、網を失った。家財道具、水飲み場、子どもたちの学校も無くなった。政府は一家族に一、二〇〇円の見舞金、五〇キロの米、二セットの服を支給してくれただけ。NGOは三日間の食料品のみの支援。漁業をするための船と網の支援は無し。これからどうして生業をしていったらいいのかわからない」と語る。このような状況はどの村を訪問しても同じであった。

今回の津波でインドの死者一一、〇〇〇人以上、倒壊家屋一二六、一八二軒。インドのダリットの人々は支援を待っている。

部落解放センターではダリットへの支援・連帯のため全国募金活動を行なっている。どうか宜しくお願いします。

郵便振替（00950－6－302047 日本基督教団部落解放センター）

（谷本一廣報）

家屋はすべて津波で流され、仮設住宅に住むダリットの人々

漁船はすべて使えなくなった（ダリットの漁村）

教会の支援とは

一月末の大雪の中、新潟県内の教会を問安する機会が与えられた。

それは、「新潟県中越地震被災教会会堂等支援委員会」を現地で開催する前に、小橋孝一委員長と共に全委員が、関東教区三役等の案内で、被害を受けた五教会の実際の被害状況を見るためでもあった。

しかし今回、考えさせられたことは、地震被害のことではない。

ある教会を訪れた時、その牧師館を見て、本当に驚き、正直なところ、私を含め何人かの方が「ここに住んでおられるのか」と声が出たくらいにその牧師館は狭く、古かった。

私も幾つかの牧師館に住み、多少の苦労も経験してきたが、この牧師館は…。

関東教区も配慮し、地震被災を期に、近くのアパートに住んで戴くように配慮されたようだ。

私たちは、教団信仰告白で「教会を信ず」と告白するが、勿論、それは建物ではなく、「全体教会」への告白でもある。

しかし、現状はどうだろうか。

パウロが、エルサレム教会を支援する時に、実際に援助するのは「お金」であるが、それを記す箇所には一度も「お金」とは記さず、「慈善の業・奉仕」との言葉を用いている（第二コリント八章）。

今回の教会支援も、実際は募金活動ではあるが、「教会を信ず」を実質化できるような内容でありたいと祈りつつ被災地を後にした。

（教団総会副議長 小林 眞）

ひとときの人

松下充孝さん

キリストを土台とする建築士

大きな身体に柔和な笑顔がトレードマークの松下さん。

二年前、さいたま市から児童養護施設の基本計画策定を依頼された彼は、キリストの愛の精神を活かした施設を設計建築しようと試みた。養護施設より家庭的養護の場としてのノーマライゼーションを設計方針として取り組んだ。既存のキリスト教施設や、牧師の意見を参考にしながら設計を完成した。しかし、従来の行政指導の施設運営では、設計理念が生かされるか危惧していた。

このような時に、主の不思議な導きにより施設長が民間から浦和東教会員の九里氏に決定し、キリストの愛に根ざした運営がなされた。子供達がいきいきと生活する様子に県内外から注目と、多くの期待が寄せられた。

超過密スケジュールの中から十一月、中越地震のボランティアの一員として小出・見附へと出向き、被災された教会や教会員の建物を調査。耐震診断士としての専門的知識を活かして様々な角度から耐力を増強する耐震補強方針を作成し夫々に補修や改築の提案をした。又、十二月には関東教区の妙高高原にある研修施設「向山荘」にも出向いて、耐震診断に加えて将来の展望まで提示してくれた。

これらの体験から彼はひとつの目標を得た。教団や教区が立ち上げた支援センターに各種専門的資格者が奉仕者として自主的に事前登録して頂き緊急時に備える、いろいろな賜物を持つ共同体である教会の特色を活かして災害の救援支援が的確にできることでしょう」と穏やかな口調で語った。

私たちの平時の心得として、建物の平面図や立面図・断面図の図面に加え過去の天災人災の被害の建物の歴史等を保管することの重要性を挙げた。

人間に定期的な健康診断が必要なように、建物もある時期に劣化や耐力を知る為の健康診断が重要であると、トレードマークの笑顔が教えてくれた。

一級建築士・松下建築設計事務所代表取締役、埼玉地区大宮教会員